

山の百名花 番外編

講師 佐藤 マキ子

【105】モミジカラマツ

高山植物というと高山を彩る美しい花々がすぐ目に浮かぶが、あまりにも地味でひそやかに咲くモミジカラマツは、高山植物好きでもあまり話題に上がらない。

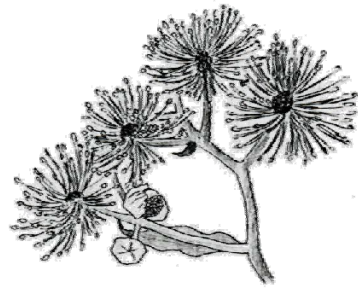
モミジカラマツはキンポウゲ科の植物で夏の北アルプスなどでは低地の樹林帯から高山の稜線の湿地帯にまで、逞しく群生している。

キンポウゲの仲間には、花卉を持たないものがたくさんあるが、大方は萼が鮮やかな色や奇妙な形に変形しているのかおもしろい。シナノキンバイ、オキナグサ、トリカブトなどがこの例であるようだ。

しかし、カラマツは萼が早々と散ってしまいい花びらもなく、1センチぐらいの白色の針状の雌シベと雄シベの束が散房状の花を枝元に多数つける。この針状の雄シベがカラマツの葉に似ていることからこの名がついたという。

カラマツの仲間はたくさんあるが、ほとんどが雄シベだけが目立つ地味な花であり

葉も細かく区別がつけにくいのが、モミジカラマツは葉が大きなモミジ形なので、すぐ見分けがつく。



佐藤

【106】メタカラコウ

メタカラコウはキク科の植物である。大柄が目立つ割には、深山の湿気が多いところに生えているためか、「皆が撰ぶ山の花ベスト百」などに名前を連ねることや、山の写真集などでメタカラコウが写っている写真などは、なかなか目につかない不遇な花だなあと個人的には感じている。

草丈は1メートル近くになり、葉は三角状のハート形で茎上部に長い花穂となって黄色い舌状の花びらを持つ花を1〜3個つける。

メタカラコウの語源は、「雌宝香（竜脳香）」根茎の香りが、竜脳と同じ芳香を持っているからだといわれている。

竜脳とは、ボルネオやスマトラ原産の背丈が50メートル以上にもなるフタバガキ科の大木の心材部に樟脳に似た芳香のある結晶を含み、これを薬用とする。香料の原料や薫香、口腔清涼剤、防虫剤などの調合原料に用いられている。

またタカラコウは「峠に生えるフキ」の意味もある。一時マルバダケがトウゲブキの別名があったとある本で読んだことがあったが、それは共にメタカラコウ属であり、この種の葉がフキに似ていること、峠や草原に自生しているからかもしれない。

類種にオタカラコウがあるが、メタカラコウに比べ強壯な姿で、舌状の花も5個から8個と多い。

